

アジア・ヨーロッパ・ラテンアメリカの情報発信(展示)の発達比較

日本から一番遠い国、ブラジルでは

大西 万知子(2003、2004年度COE研究員・RA) ONISHI Machiko

はじめに

2005(平成17)年12月2日から12月18日まで、ブラジル、サンパウロ大学日本文化研究所にて、研究の機会をいただきました。今回の研究目的は、私の生まれ育ったアジア、留学先であったヨーロッパ、そして、まだ行ったこともないラテンアメリカの博物館における情報発信(展示)のあり方について、体系的に比較し、相關的に考察することでした。そして、今回の海外派遣研究は、この神奈川大学COEプログラムを成功させたいという思い、研究を通じて日本と世界の架け橋になりたいという願いと、自分自身への新しい視点とより広い視野を作るための挑戦でもありました。

ブラジルのいくつかの博物館を訪ねて

2週間の滞在期間、サンパウロ市内の博物館(日本人移民資料館、移民博物館、サンパウロ美術館)や、サンパウロ大学の博物館(考古学民族学博物館、現代美術館、パウリスタ博物館)を訪ねることができました。また、広島県人会や、在ブラジル原爆被爆者協会へも訪ね、私の、より絞った研究テーマである広島原子爆弾投下についての展示のあり方についても調べることができました。2週間の訪問で、ブラジルの博物館を数館訪ねただけで、ブラジルの博物館の傾向や特徴をつかむことは不可能ですが、ブラジルでは、博物館という場所が、そこに暮らす人々にとって、あまり魅力的な場所ではないかもしれないと感じました。ブラジルには、サンバやサッカーの楽しみや、食文化や音楽文化が豊かに存在しており、物を置いてみせるという場所は、生き生きとした生命のある場所として存在するのが難しいのかもしれないかもしれません。そのほかの理由として考えられるのは、この地は、世界各地から珍しいものを集めるという場所としてよりも、逆に、この土地の持つ金や銅といった豊かな資源や、羽飾りなどの美しい品々を、心を魅了するものとして、集められていった場所だからです。さらに、考えられる点は、先住民であるインディオがあまり、物欲がなかったことや、砂糖黍農場、金やダイヤモンドの採掘、コーヒープランテーションのために、奴隷としてアフリカから

連れてこられた人々は、おそらく、彼らの身近な生活用品をたくさん持って来られなかったのだと思います。そして、祖国が戦禍という状況で、ブラジルへ移民として来た人々は、過去よりも未来に希望を持って生きてきた人、現在を一所懸命生きてきた人々です。彼らにとって、過去の記憶が付随する物は、あまり大きな価値を持っていなかったのかもしれないと感じられます。このような歴史的背景と、豊かな資源と自然、多様な民族で織りなされたブラジルの地に存在する博物館は、本来、ブラジルにしか発信できない大きな力を秘めているはずでは

おわりに

博物館という場所は、一見、普遍的な知の場所、記憶の場所として見えますが、実際、ある文化(ヨーロッパ)が生み出した特殊(パティキュラー)な記憶の回路の一つとして、位置づけられます。その特殊な記憶の回路が、植民地化、グローバル化、ヨーロッパ近代の生み出した普遍的志向の影響をうけて世界中に広まったと考えられます。博物館という場所は、一般に、外見的、静的なイメージが強いですが、実際には、集める、保存する、展示するという、積極的な人の行為がその深部に隠されています。今後、人類が発達させてきた記憶の場所、世界に広がる博物館を、静的、外観的イメージの場から解き放ち、ヨーロッパの文化が長く育ててきた、人類の身体的記憶や集合的感性を映し出す場として、探求していきたいと思います。



Ferrante Imperato's museum in Naples.
Hooper-Greenhill, Eilean
' Museums and shaping knowledge (1992年) 127頁